Career Power

The 19th Library Fair & Forum Document

第 19 回図書館総合展
キャリアパワー主催フォーラム記録
＜PART Ⅱ＞

2017 年 11 月 8 日 パシフィコ横浜にて開催

あらたな学習空間としての図書館
～拡張書架としての外部倉庫の活用～

【講師】　加藤　潔　（工学院大学図書館長）
　　矢野　裕司　（寺田倉庫株式会社）
【進行】　木村　麻美子　（株式会社キャリアパワー取締役執行役員本部長）

【キャリアパワー：木村】
それでは定刻となりましたので、只今から第１９回図書館総合展キャリアパワー主催のフォーラムを開催させていただきます。

本日はご多忙の中、全国から多数の図書館関係者の皆様にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。本日進行を努めさせていただきます、私、株式会社キャリアパワー事業本部の木村と申します。どうぞ宜しくお願い致します。
私どもキャリアパワーは、京都に本社を置く総合人材サービスの会社でございます。この図書館という業界、そして大学、教育機関という業界にご縁をいただきまして、お陰さまで、現在、沢山の大学様とお取引をさせていただき、大学図書館の運営のお手伝いをさせていただいております。

さて、本日のフォーラムのテーマは、「あらたな学修空間としての図書館～拡張書架としての外部倉庫の活用～」とさせていただきました。
２０年以上前、私どもが、初めて大学図書館の委託運営のお手伝いをさせていただいた当初と比べると、大学図書館に求められる役割というのが、近年随分変わってきたのかなというふうに感じます。
弊社も、この図書館総合展で過去何度か、ラーニングコモンズということに焦点をあてたフォーラムを開催させていただきました。数年前から、ラーニングコモンズを併設する図書館が増えてきまして、学修支援を行うということが、図書館において非常に重要な機能の一つとして、位置づけられてきたのかなというふうに感じております。
しかし、ラーニングコモンズや学修支援としての機能、そして空間というのを図書館に持たせようとすると、当然その物理的なスペースの確保というのが、必要となってまいります。ただでさえ、多くの図書館が、年々増えていく蔵書の管理、その保存スペースに苦労されているということは、日々運営をお手伝いさせていただく中で、私どもも感じていましたので、図書館に新しい機能を持たせて、そのためのスペースを確保するというのは、非常に大変なことだなというふうにも感じていました。
本日のフォーラムでは、今年の春に新しい図書館をオープンされ、これまでに無かった新しい学修空間の実現に成功された、工学院大学の図書館長をお招きして、新たな学修空間の実現に至った経緯や、取組みについてお話をいただきます。本日のこのフォーラムが、ご参加頂きました皆様にとって、少しでもご参考になればいいなというふうに願っています。

本日、御講演の講師としてお招きしておりますのは、工学院大学図書館長　学習支援センター所長　教育推進機構教授　理学博士　加藤潔様です。宜しくお願い致します。

２０１７年春に開館した、工学院大学八王子キャンパス新２号館は、建物全体がラーニングコモンズというコンセプトで、学生が主体的に、自由に学修ができる空間の工夫が、随所に散りばめられた作りになっています。そして、この新たな学修空間の実現には、拡張書架として外部倉庫を活用したことが、大きく影響しているというふうに伺っております。
本日の講演には、拡張書架として工学院大学の図書館運営を担っていらっしゃる、寺田倉庫株式会社ドキュメントソリューションストレージグループの矢野裕司様にもご登壇いただきまして、その具体的な運営についてもお話いただきます。
それでは、加藤先生宜しくお願い致します。

【工学院大学図書館長：加藤潔　講演】
只今ご紹介いただきました、工学院大学の加藤でございます。本日は宜しくお願い致します。
ここにありますように、「あらたな学修空間としての図書館～拡張書架としての外部倉庫の活用～」というタイトルで、しばらくお話しをさせていただきます。

まず、工学院大学自体の紹介をさせていただきます。本学園は理念として、「無限の可能性が開花する学園」を掲げております。本学のホームページを見ていただきますと、個々の単語に詳しい注釈がついていますので、興味がある方はご覧下さい。
どんな学校かといいますと、結構歴史が古くて、１８８７年に創立されました。ですから、今年でちょうど創立１３０年ということになります。
この１８８７年とはどんな時代だったのしょうか。少し横道にそれますが、実は、私、本業は物理学の教授でありまして、学生に電磁波の話しをする時には、１８８８年という年は、ヘルツさんという方が、人類としては初めて、電磁波の技術を実際に実験して研究したという、そういう年だと紹介します。工学院大学創立は１８８７年ですが、これのちょうど翌年が１８８８年で、その年に最初の学生が入学しています。１８８８年の段階では、「電磁波なんて電気と磁気が波となって空間を伝わる、それで何が面白いのか」という感じで、単なるアカデミックな興味だった訳ですが、今日では、皆さん御存知のように、スマホからテレビ、ラジオから電子レンジなど、色々なものに活用されている、我々の社会に無くてはならない基幹技術になっています。
うちは工科系の学校ですから、「技術とはそういうものなのだよ」という文脈で、学生にこの話をしているわけです。ちょうど、工学院大学が生まれた頃に、「おぎゃー」と生まれた新しい電磁波という技術が、今や社会に無くてはいけない基盤インフラになってきている、それと共に工学院大学も発展して今に至っているということをどう思いますか、なんていう話を授業の時にしたりします。それぐらいの歴史をもった学校だと思ってください。宜しくお願いします。
それから、今、わざとこういう余計な話をした理由があります。今の話から皆さん、「あっ、この加藤というのは図書館の専門家ではないな」ということが判りましたよね。ですから、この後ちょっと怪しい話しが出てくるかもしれませんが、その辺はご勘弁願いたいと思います。そういう伏線もあってですね、こういう話をちょっとさせてもらいました。
今述べたように、１８８７年に本学が創立された

わけですが、当時は「工手学校」という名前の学校でした。「工手」というのは、今では珍しい言葉だと思うので、どういうことか、すこしお話させていただきます。
明治の初年、まさに日本が、新しい技術を取り入れて、国づくりをしていた時期でございます。当時は、いわゆる帝国大学、いまの東大が、工学士と呼ばれる技師、今でいうエンジニアを、年に何人かずつ卒業させて社会に送り出しておりました。でも、とてもそれでは、当時の技術革新に間に合わない。特に、現場の職工達と、その技師をつなぐ人材がいないという状況でした。そこで必要になるのが「工手」です。トップにいる、大学を出たほんの一握りの上級の技師と、現場にいる沢山の職工たちの間をつなぐことのできる、技術のわかる人材を作ろうという学校として工学院大学は始まりました。ですから、そういった意味で、『「工」の精神』というのが昔からありました。

このスライドに書かれているように、建学の精神は、「社会・産業と最先端の学問を幅広くつなぐ『工』の精神」となっています。ですから、戦後大学になった後も、長らくのあいだ、本学は工学部一本槍でやってきました。でも現在では、少しレンジを拡げて、工学部、先進工学部、情報学部、建築学部という４学部体制になっています。
キャンパスは、こちらの左側の写真の高層ビルの新宿キャンパス、それから、右側の写真の八王子キャンパスの２キャンパスからなっております。新宿キャンパスは、最近では珍しくありませんけれども、高層ビル一本からできているキャンパスでございまして、ほんとに新宿の西口副都心、都庁の隣にあります。
それから、職員数とか学生数は、こんなものです。ザクっといって大体５、６千人位の学生がいるというふうな感じです。

続いて本学の図書館についてお話させていただきます。図書館は、さきほど見ていただきました新宿校舎でいいますと、２階、３階のフロアにあります。それから八王子校舎、これは、後から詳しく説明いたしますけれども、今年の３月に落成し、４月から供用されている２号館と呼ばれる建物がありますが、その２号館にあります。

スライドに、細かい蔵書数を書きましたが、ここにありますように、新宿、八王子合わせまして大体二十数万冊の図書資料がございます。そんなに無茶苦茶多いわけではありませんけれども、まあ、そこそこの規模を持っている、というところです。
ただし、うちに限らずどちらの大学さんも人手不足だと思うのですが、これだけの規模の図書館を運営していかないといけないのですけれども、専任職員としては、現在２名しかおりません。この２名というのは私のような役に立たない館長を除いた正味の職員の数字です。当然これだけでは十分に業務が回りませんので、キャリアパワーさんに業務委託をいたしまして、基本的なカウンター業務をはじめとした図書館関係の業務を、お手伝いしていただいているということでございます。改めてここで感謝申し上げます。

いくつか特徴のあるところを説明させてもらいます。まず電子ジャーナルです。どちらの大学さんも電子資料は入れているとは思うのですが、本学は理工系の学校でございますので、電子ジャーナルの活用が非常に活発です。実際に、エルゼビアとか

Springer とかの営業さんと、色々と打合せをやっておりますけれども、そういった方からも、「工学院さんは大学の規模にしては、随分閲覧数が多いですよね」、というお話しを聞いております。

電子ジャーナル

データベース・電子ジャーナル年度別統計

	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
データベース名						
JDream Ⅲ	11,111	8,014	8,478	7,933	12,970	20,790
CiNii	91,952	87,436	75,073	64,017	81,353	63,624
SCOPUS	4,391	2,927	2,902	3,309	3,816	9,434
MathSciNet	6,752	2,293	6,862	3,693	1,871	2,521
聞蔵Ⅱ	361	327	285	305	276	408
電子ジャーナル						
Springer	5,715	5,456	6,323	7,007	7,854	7,735
Nature	545	501	589	905	1,841	2,374
Science	420	329	710	374	604	*
Cambridge UP	157	144	221	217	213	*
Wiley(旧Blackwell)	789	1,089	1,210	1,186	1,661	2,456
ScienceDirect	30,401	27,652	23,881	25,562	29,583	35,515
IEL Online	1,261	1,291	1,388	1,031	1,437	6,249
日経BP	10,975	5,321	5,436	12,528	6,181	12,669
CiNii	58,945	48,353	42,861	34,763	45,013	42,710
ACS	5,761	4,736	4,454	5,004	7,011	8,907
RSC	663	848	1,239	2,104	2,547	333
JSTAGE	11,370	896	1,004	723	1,329	1,736
電子情報通信学会	496	795	713	634	1,071	1,416
Springer E-books	372	152	329	745	565	1,614
Net Library	146	66	155	182	766	2,273
JIS規格	763	779	621	969	741	869

研究活動

かなりの数量のアクセスあり

購読料の変動・高騰が問題

逆に言いますと、本学の先生方や学生が、一所懸命、研究活動をやっているということになりますので、それはそれで良いわけでございます。しかし、一方では当然のことながら、このコストをいかにして維持するかが、常に頭を悩ませている問題でもあります。

特に、欧米系の雑誌は、商習慣が違いますので、ユーザーに全く断りも無く、パッと突然値上げをするとかします。あと一応契約は円建てになっているとはいえ、為替レートの変動にしたがって、急にそれが不利に働くということもあります。なので、この電子ジャーナル、活発に使われているという点では非常に良いのですけれども、これを如何にして維持していくかというのが、結構大変だというのも、申し上げておきたいと思います。

もうひとつの本学の図書館の特徴ですけれども、特別コレクションというものを持っておりまして、これらを展開しております。

具体的には４つございまして、「今　和次郎コレクション」「竹内　芳太郎コレクション」それから「ヒッチコック　コレクション」。ちなみにヒッチコックというのは、映画のヒッチコックではなくて建築家のヒッチコックです。それから、過去に本学の学長を務められました、伊藤先生の「伊藤鄭爾先生のコレクション」。この４つを展開しております。

特別コレクション

どちらかというと、建築系のコレクションだというのは、お分かりいただけると思います。さきほど申し上げましたように、本学には建築学部という学部もございますので、こういった建築系のコレクションが展開されております。

ついでに脱線しますと、この建築学部なのですが、できたのが２０１１年です。建築学科というのは結構日本中どこにでもあります。ところが、皆さん意外に思われるかと思いますが、建築学部というのは、本学が作るまで、日本に一切無かったのです。ですから、工学院大学の建築学部は、日本で最初の建築学部です。

本当は、日本で最初の唯一の建築学部、と言いたかったのですけれども、残念ながらその２０１１年、関西のほうでもやっぱり１つ出来ちゃいました。なので、唯一のというのは取らないといけないのですが、少なくとも日本で最初に出来た建築学部です。今は、段々増えていますが、そういうふうなことも、ちょっと強調させていただきたいと思います。

で、この特別コレクション、結構、国内・国外から引き合いが多くあります。スライドでお見せしているのは２０１６年度の実績ですが、出版物に掲載させていただきたいとか、展示会に使いたいというリクエストが色々来ております。